＜様式３＞

学校園教育推進サポート事業　報告書

学　番	１７１９	学校名	新通つばさ小	校長名	小林 由希恵	作成者名	教諭 土屋　康子
学校教育推進サポート担当者名		教頭　林　俊行				電　話	025-201-7172

１　実践のテーマ　　個別最適な学びの実現に向けた学びにくさを抱える児童への支援の在り方
～だれもが夢に向かって羽ばたいていける力を伸ばすために～

２　テーマ設定の理由

すべての児童が自分に合った学習活動ができる個別最適な学びの実現が求められている。しかし，文部科学省が令和４年に実施した通常学級についての調査では，「学習面において著しい困難を示す」とされた児童生徒数の割合は６．５％であり，当校においても「学習面において著しい困難を示す」と学級担任が見取っている児童の割合は７．３％である。

そこで，すべての児童の個別最適な学びを実現するために，まずはこうした学びにくさを抱える児童への支援から始める必要があると考えた。これまでも，特別支援教育コーディネーターを中心に様々な取組を進めたものの，学びにくさの実態が多岐に渡り，具体的な支援の方法が分からなかったり教材が不十分だったりすることがあり，より一層組織的に取り組んでいく必要があることが見えてきた。

このように対応の難しさが学校として大きな課題となっていることを受け，通常の学級に在籍する学びにくさを抱える児童への支援の在り方について学び，新たな体制づくりを進めたい。その際，「通常学級内での効果的な支援」と「学校体制でのシステムづくり」という二つの視点からアプローチをし，次に示す実践内容で児童が抱える学びにくさに寄り添った支援を行い，すべての児童が自分に合った学習活動ができる個別最適な学びの実現を目指したい。

３　実践内容

(1)通常学級内での効果的な支援を探る

①　児童の状況・対応を一目で分かるようにまとめた「つばさ学び支援シート」の作成と活用

学級担任，教科担任等，多くの教職員が，学びにくさを抱える児童の現状や対応を共有できる「つばさ学び支援シート」を自作し，活用する。適宜シートの見直しを図る。

②　ICT による読み上げや聞き取りを可能にする学習上の支援機器等教材の活用

読み上げ機能を有するイヤホンや集音機能のあるイヤーマフ等の個別に抱える学びにくさを緩和する教材を用意して試用できる環境を整える。

③　保護者と取組に関する共通理解を図る機会の設定

学びにくさを抱える児童の現状や対応について，定期的な保護者面談や学習参観の機会を設定する。

(2)学校体制でのシステムづくりを進める

④　組織的な対応を可能にする校務分掌の設定

特別支援教育コーディネーターを二人体制にし，一人を学びにくさを抱える児童への対応に特化させる。担当を中心に全校児童の現状について把握し，情報共有を図る。

⑤　職員一人一人が児童への関わり方について学ぶ研修の設定

大学教授等，専門的な知識を有する学校関係者から，実際のケースを基にして声のかけ方等の具体的な支援について，職員が学ぶ研修を設定する。

⑥　専門機関等の外部との連携

新潟市障がい者 ICT サポートセンターと連携して支援機器等の導入や使用に関する研修会を行う。

⑦　義務教育終了段階を見据えた小・中学校の連携

小学校での取組が義務教育終了段階まで継続的に取り組めるように，中学校に対して情報を伝達したり，中学校の状況を共有したりする。

4　実践計画

① 新校務分掌「学びにくさ支援・不登校対応部」の設定。
② 指導計画「つばさ学び支援シート」の作成と，学年部体制での児童への支援の検討。
③ 新潟市障がい者 ICT サポートセンターの見学と，学習支援機器・道具についての職員伝達研修。
④ 新潟市立上山小学校 賀田教諭の「ビジョンスライド」を使った授業の視察と職員伝達研修。
⑤ 新潟大学名誉教授 長澤正樹先生からの指導を基にした研究授業と，長澤先生による講義。
⑥ 中学校区の小中学校職員との連携。

5　成果

特別な対応(特別支援教育的対応，不登校対応，生活・生徒指導的対応)を要する児童全てを「学びにくさを抱える児童」と捉え，今年度新設の「学びにくさ支援・不登校対応部」で，特別支援教育，不登校対応，生活・生徒指導の視点も取り入れた形の指導計画「つばさ学び支援シート」を作成した。このシートをもとに，学年部で学びにくさを抱える児童についての支援を考える体制づくりを始めることができた。シートには「支持的風土の醸成・形成，UD」について明記する欄もあり，どの学級でも，それらを活用した学級づくりを行うことにつながった。

ビジョンスライドを使って

iPad でのノートテイク

学年部体制を軸に検討を重ねて行った研究授業（２年２組）では，抽出児（学びにくさを抱える児童）の実態（担任の見取りとリタリコのアセスメントによる実態把握より）をふまえての検討会や授業準備ができた。講師の長澤正樹先生に事前に学級の様子を見ていただいたり，協議会に参加していただいたりしてご指導をいただき，抽出児への支援を明確にし（児童Ａ：iPad でのノートテイク，児童Ｂ：トークンによる意欲の持続と学習時間の調整，児童Ｃ：リーディングルーラーの使用と文を選択しての作文)，抽出児自身もその支援の方法に賛同している形で授業実践をすることができた。

研究授業後の協議会では，成果として，抽出児それぞれが自分なりの方法で授業のねらいにせまる学習ができていたこと，ビジョンスライドや３行または５行かを選べる作文カード等の工夫が抽出児以外の児童にも有効に働いていたことなどが上がった。本授業では抽出児が自分の苦手な部分を意識しながら学習方法を自分で決めることで学習意欲や学習効果が上がる姿が見られ，学びにくさを抱える児童への配慮を行いながら学級全体がねらいにせまる授業を行うことができたと言える。また課題として，普段の授業の適切な場面で複数の児童の学びにくさや困り感を解決したり支援したりするにはどうしたらよいか，学級全体がねらいにせまるための工夫として自分の書いた文章がどのレベルなのか自己評価する場があるとよかったのではないか等の声が上がった。抽出児だけでなく児童それぞれに課題があることをふまえると，日常の授業の中で様々な子どもの困り感に対応できる工夫として， 担任からの一方的な支援だけでなく，児童本人が日ごろの自己評価や振り返りの場面などで自分を見つめ，自分の困り感や自分のめあてを意識して助けを求めたり方法を選んだりできるようにすることが必要であり，その方法の追求と実践が今後の課題の一つと考えられる。

研究授業の際には中学校区の小中学校の職員にも参加していただき，「つばさ学び支援シート」の有効性や，児童への支援の在り方，小学校同士の連携，小中学校の連携について意見を交換した。「つばさ学び支援シート」については，学級の支持的風土の醸成の取組についての明記する欄があることやシートを基に学年部体制で児童の情報や対応を共有する体制に賛同いただいた。また研究授業では，特別な支援を要する児童が複数存在する学級において個々が生き生きと学習している様子から，個や全体への支援指導のよさを感じていただけた。そして，このような支援がどの学校でも共通に行われ，中学校にスムーズに引き継がれていく重要性についても再認識できた。これらのことから，中学校区共通の指導計画や支援の方法，共通の特別支援教育啓発動画の活用等を行い，学校間で授業を見合ったり進学後の生徒の様子を聞いて小学校での支援に生かしたりするなど，連携の在り方を模索することができた。

１・２学期の学習についての児童アンケートでは，「課題を考えるときには，いろいろな考え方や学び方があることが分かりましたか」93.4%→ 94.1%，「いろいろなやり方や学び方から，自分で決めた方法を選ぶことができましたか」94.3%→ 96.8%と肯定的な回答が増えた。すべての児童が自分に合った学習活動ができる個別最適な学びの実現を目指し，来年度も引き続き研究と実践を行っていきたい。